

---

LUCK - 9999

シェイフォン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

LUCK - 9999

### 【Nコード】

N8128W

### 【作者名】

シェイフォン

### 【あらすじ】

主人公の高原幸一は下校途中、車にはねられて死んだ。そして周りを悲しませた罰として実質上、異世界にある屋敷に軟禁されてしまう。

この境遇から解放されるには善行を積むしかない。幸か不幸かトラブルは向こうからやってくる。そしてそれを解決していくうちに知るこの世界の闇。

異種族の違いによる差別、そして繰り返される戦争によって憎悪と悲鳴が渦巻くイースペリア大陸。

高原幸一はそこで一体何を考えるのか。

人物紹介（前書き）

2011/12/29更新

## 人物紹介

コウイチ「タカハラ

種族 人間

17歳

本編の主人公。

交通事故により死亡。死んだことにより迷惑を掛けた罪としてUCCKが-99999となり、この世界に飛ばされる。

元から受け身な性格だったが、この世界はトラブルがやってくるので、その傾向がより顕著になった。

突っ込みを入れることはあるが、基本的に怒ることはない。来る者は拒まず、去る者は追わずというスタンス。

素材と設備さえ揃えば例え核であろうと作ってしまう。ただ、そうになると設備を作らなければならず、また本人もそんなものを作る気はないので今ある設備で作れない物は諦める。

## 1話 始まり（前書き）

皆様の意見を参考にして新しく書き直しました。  
納得して頂けると幸いです。

## 1話 始まり

『交通事故で死んだ享年17歳の高原幸一へ』

「は？」

何故か俺はどこか分からない部屋におり、そしてソファに腰掛けて手紙を広げていた。

『言いたいことは色々あるだろうが、まずはこの手紙を読み進めて欲しい』

手紙に先を促されるのは癪だが、その通りなので俺は文に目を走らせる。

『お前はつい先程、飲酒運転をしていたドライバーに赤信号なのに突っ込まれ、全身を強打して死亡。そこまではいいか？』

確かに俺は高校の帰り道、交差点を渡っていたはずなのだが、道路の真ん中辺りからの記憶が無い。おそらくそこではねられたのだろう。

『お前が死んだことで両親は勿論のこと、友人、学校、そして警察まで多大な迷惑をかけてしまった。ゆえに、お前は人を悲しませ、迷惑をかけてしまった罪により賽の河原の刑が妥当だ』

「おい、それはおかしいだろう！」

こっちは一方的に巻き込まれた被害者なのに、どうしてその上罰

を受けなければならぬのか。まさしく泣きつ面に蜂だ。

『が、事情を鑑みるとそれはあまりに厳しすぎるのではないかと考え、お前には別の償いをしてもらうことになった』

「……それは喜んでいいのか？」

最悪のケースは免れたものの、罰を受けることに変わりはないらしい。

『そして、お前の罰は幸運が最悪になり、全ての行動が裏目に出るような刑に処した。分かりやすそうな例を挙げると、お前が何かを買おうとして外に出ると急に雨が降り、不良からカツアゲを受けた拳句殴られ、ボロボロになりながらも店に辿り着いても商品は売り切れで帰り道に財布を落とす。そして拳句の果てには犯罪者と似ているという理由で留置所に一晩過ごすことになる』

「ちょっと待て！ それは酷過ぎないか！」

『が、安心しろ。そうなるのはこの屋敷から一步外に出た時点から始まる。つまり、お前はこの屋敷に閉じ込められたわけだ』

「どこを安心しろと言うのかゆっくりと話し合いたいな」

『そして、お前がいる場所だがここは地球ではない。中世時代に剣や魔法、異種族が登場するイースペリアという世界だ』

「うん？ どういうことだ？」

『お前はもう死んだ人間だ。死んだ人間は元の世界へと戻ることが

出来ないのだ。そこは諦めるしかない』

「……もう会えないのか」

思い出すのは父さんや母さんの顔、友人との他愛のない話や、少し気になる子の笑顔。

『感傷に浸っている場合ではないぞ』

何故か手紙に怒られた。

『お前には3つの贈り物を贈る。まず1つはこの屋敷だ。敷地内において外部と接する面に道具屋が設置されているからそこで日々の糧を得るが良い。なお、最初はサービスとしてこの屋敷に設置されている納戸や倉庫には素材を一杯にしておいたぞ』

「ありがとうと言っておくべきところか？」

『2つ目にお前はこの時代において住人と話せるよう言語と、作れない物は無いよう技術と知識を与えておいた。試しに何かを想像して作ってみる』

俺は書かれていたように、想像してみる。

「そつだな、睡眠ガスと似たようなものは作れないかな」

俺がそんなことを考えると、急に頭の中にそれを作るための素材や手順が再生された。

そしてそのまま納戸から草を数種類か選んで頭の中に浮かんだ通

りに作ってみる。

「……この甘い匂いはクロロホルム？」

瓶に入った液体を見てそう評する俺。

どうして草からこんな化学薬品が作れるのか分からないが、少し吸うと咳や吐き気を催すことからクロロホルムで間違いないだろう……何で俺はこんな知識を知っているんだ？

『それも私が与えたものだ』

「そうなのかよ……」

俺は手紙を読んでいるはずなのに、会話をしていると錯覚するのは何故だろう。

『そして、最後の贈り物だが。お前の行動次第でLUCKが変動することだ。善行を積むとLUCKが上がり、悪業を行うと下がる。上を向いてLUCKと念じて見るとよい』

書いてあるままに念じると視線の先に『LUCK - 99999』  
という文字が浮かび上がっていた。

『それはお前しか見えないものだ。この世界に住んでいる者は地球と同じく、運が数値化されて表示することはないから誤解するなよ』

つまり油断すれば子供にでも殺されるということだろう。

そこは現実と一緒だな。

「なあ、俺はどうやって善行を積むんだ？ 延々と道具を作り続けて売ればいいのか？」

外に出ることはできず、ただ道具を作り続ける　それはそれで苦痛だな。

『安心しろ、そんなことはない』

その続きは。

『何故ならトラブルは向こうからやってくるのだ。お前はただ待っていれば良い』

「それはまた災難だな」

『人生もそんなものだ。トラブルというのは自分に非が無くとも訪れるもの。さて、高原幸一よ。これから先苦難が続くと思うが、お前なら乗り越えて見せるだろう……頑張れ』

その文字と同時に俺から最も離れた位置にある窓ガラスが破られて何者かが侵入してきた。

「……犬耳？」

銀色の髪を肩に切り揃え、スタイルもそれほど悪くないのだが、何故か犬耳と尻尾が生えている。

「どうしてそんなにボロボロなんだ？」

例えるなら飢えた猛獣。擦り切れた衣服を身に纏い、頬はこけて目がキラキラと輝いている。

俺と同じ17歳ぐらいに見えるのに下手に近づけば食い殺されそうな雰囲気を漂わせていた。

「……死ね！」

犬耳娘が殺気を振りまきながら手に持った剣で斬りかかってくる。

身体能力は高いらしく、後数歩で俺の元まで辿り着きそうだ。

このままだと俺はあの犬耳娘が持った剣によって斬り殺されるだろう。が、そんなわけにはいかないので俺は先程作ったクロロホルムを床に投げつけた。

瞬間的に揮発したそれは俺が息を止めたにもかかわらず目や喉に痛みが走ったがそれだけで終わる。

俺はその程度で済んだのだが、犬耳娘はそういかなかったようだ。

犬の嗅覚は人の数千から数万倍。それに加えて不意を打たれた出来事だったので、犬耳娘はものも言わず、一瞬で昏倒した。

「やれやれ、いきなりトラブルが舞い込んできたな」

気絶した犬耳娘を睥睨しながら俺はそう呟く。

振り返れば俺は数時間前まで普通の高校生だったのだが、何かの因果によってこの世界で罪を償うことになった。

納得しているかと問われれば頷くことはできないが、納得しないからと言って辞めることはできないのなら反抗するだけ無駄。

「まあ、やるだけやってみましようかね」

先程まで読んでいた手紙が自然発火し、跡形もなくなっていくのを見た俺はそう決意した。

## 1話 始まり（後書き）

もうお分かりと思いますが、この犬耳娘はシヨコラです。

## 2話 ショコラとの出会い

この屋敷には地下牢もあるらしい。

何でそんなものまで設置されているとかはもう突っ込まない。

だから俺は侵入してきた犬耳娘をまずはそこに置いて、料理とある物を作ってからまた戻ってきた。

「殺す殺す殺す殺す！」

どうやら向こうは興奮状態らしい。

俺の姿を認めた瞬間目を血走らせて狂ったように鉄格子を揺さぶっていた。

「まあ……予想通りだよな」

最初の出会いからある程度予測していたとはいえ、実際にその通りとなるとへコムものがある。

「まさか始めからこれを使う羽目になるとは思わなかった」

そう呟きながら取り出したのはハーブの一種であるカモミールとよく似た効能を持つ植物をすり潰した粉。

カモミールは興奮を抑えて安静にさせる作用があるので、その粉に火を付けて香を炊く。

この地下牢の空気の通路は出入り口なのであつという間に香りが  
充満する。

犬の鋭い嗅覚も手伝ったこともあり、犬耳娘は見る見るうちに落  
ち着いていった。

「落ち着いたか？」

俺の問いに犬耳娘は憎しみを込めた視線で返答する。

「はあ……まあ良い。ほら、食事だ」

俺はため息を吐きながらスプーンと小皿と水を渡し、そして取り  
出し口に大皿に入った肉と野菜の炒め物、そしてパンを置いた後、  
俺は座って自分用の小皿とスプーンを出した。

「ん？ 何かおかしいことでもあるのか」

別用のスプーンで大皿から小皿へ自分の食べる分を移していると、  
犬耳娘は信じられないと言う風に目を見開いていた。

「……どうして一緒に食べるの？」

どうやら俺と一緒に食事を取ることが信じられないようだ。

「お前には聞きたいこともあつたし、そろそろお昼時だからちよ  
うど良いかなと思つてな」

俺は本心からそう述べたのだが、犬耳娘は首をブンブンと振り始  
める。

「嘘よ嘘！ 人間がこんなに優しいわけがない！ これはあれね！  
こうして私の反応を見て楽しんでいるのね！」

どうして一緒に食事を取る程度でそこまで邪険な態度を取られるのか理解不能だったが、とりあえず俺の行動は犬耳娘の常識からするとありえないということが分かった。

「まあ、何だ。冷めるから早く食べた方が良い」

「食べるわけがないじゃない！ 人間が」

犬耳娘はいきり立って拒否しようとするが。

キュルルルル

体は正直だった。

犬耳娘は真つ赤になりながら小皿とスプーンを取って食事 시작했다。

「ふうん、人間にしては美味しい物を作るじゃない」

犬耳娘は全て食べ終え、唇に付いた汚れを舐め取りながらそう感想を漏らす。

「……お前はもう少し加減しろよ」

俺がジト目で睨むのは用意した料理の大半を全て犬耳娘に食われ、結果的に俺は最初に取りつた分しか食べられなかったからだ。

「仕方ないじゃない。しばらく草の根や昆虫しか食べていなかったから、こういうまともな料理は久しぶりなのよ」

悪びれもなくそう言い放つので俺はもう追及を諦めた。

「もういい……で、本題に入って良いか？」

俺の言葉に場の空気が一瞬で変わる。

先程までカラカラと笑っていた犬耳娘は鋭い目つきへと変化した。

糸が張り詰めるような沈黙の中、俺が発した言葉は。

「ここはどこだ？」

「……は？」

またも沈黙状態へと変わったが、今回は呆れの要素が強い雰囲気だ。

「ここはイースペリア大陸のどこにあたる？ で、近くに街などはないのか？」

「え？ ちょっと待って。あんた、もしかして記憶喪失？」

犬耳娘のうるたえに俺は首を振る。

「信じてもらえないかもしれないが俺は別世界にいた。知っている

のはこの世界の大陸名と剣や魔法、そしてお前の様な異種族が存在しているということだけだ」

犬耳娘は俺の言葉をどう解釈していいのか迷っているようだ。せわしなく尻尾を動かす様子からそう判断できる。

「えーと……あなたの名前は？」

「高原幸一」

「珍しい名前ね。それで、出身地は？」

「東京だ」

「トウキョウ？ ……まあ良いわ。あなたは何の種族？」

「種族と言うのは族名と言うことか。それなら俺は日本人だ」

そこまで答えると犬耳娘は額を抑えて天を仰ぐ。

「あー……こりゃ私はとんでもない出来事に遭遇したみたいね。話の筋は通っているけど、出てくる言葉は全然知らないことばかり」

「俺からしてもとんでもない出来事なのだから」

突然死んで異世界に飛ばされ、そして状況を理解する間もなく犬耳娘から殺されかけるといふ場面に出くわしたのは俺が始めてだろ  
う。

「とにかく、俺としては今の状況を知りたい。ここがどこで、何の

風習があるのか知らないと何もできないからな」

「それなら近くに大きな都市があるからそこに行けばいいじゃない。あそこは人間が支配する国の都市だから同族のあんたなら優しく接してくれるわよ」

「そうしたいのだが、生憎俺は呪いによってこの屋敷の敷地内から出ることを許されない。正確には敷地内を囲っている塀から先には行けないんだ」

「あの無駄に高くてつるつる滑って登れなかったあれね、どうして出られないの」

「俺がこの屋敷から出た瞬間俺にありとあらゆる不幸が起こってしまつらしい」

「それを信じる根拠は？」

「俺がこの屋敷にいることと、見たことも無い薬や料理を簡単に作れたことから信じている」

一通りそう答えると犬耳娘は頭がガシガシと掻き始める。

「……正直私の手には負えないわ。何よこれ、飢えと渴きが限界に達したので、どこでも良いから人間の住む民家を襲おうとして入った先がこんなとんでもない場所だなんて」

そんな理由で見ず知らずの俺を殺そうとしたのか。

どうやら犬耳娘からすると人間は相当嫌悪すべき存在らしい。

「で、俺の質問に答えてくれるか？」

俺がそう催促すると、犬耳娘は呆れたように溜息を吐く。

「……シヨコラよ」

「うん？ 何が？」

俺が聞き返すと犬耳娘は少し怒ったような言い方で。

「私の名前はシヨコラよ。あんただけ名乗らせておきながら私だけ名乗らないのはおかしいじゃない。だから私の名を教えたのよ」

シヨコラは俺に僅かなりとも心を許してくれたらしい。その事実  
に俺は嬉しくなる。

「何よその笑顔、腹が立つわね。けど、まあ良いわ。それよりもこの世界の常識について教えてあげるからまずはここから出なさい」

俺は頷いて牢屋の鍵を開ける。

「次にどこかシャワーが使えるところはないかしら」

「ん？ どうしてだ？」

俺が尋ねるとシヨコラは顔を赤くしながら。

「まずは体の汚れを落としたいの！ それぐらい察しなさい！」

何故か怒られる羽目となった。

だから俺は屋敷の浴槽室へ連れて行き、そこでの使い方を一通り教えた後、終わったたらリビングに来てくれとそう伝言を残してその場を去った。

現在のLUCK - 9989

## 2話 ショコラとの出会い（後書き）

ショコラは17歳ぐらいの容姿という描写を第1話に追加しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8128w/>

---

LUCK - 9999

2011年12月29日13時25分発行